

ってなされるようになるが、M. はそれらの内容を比較検討し、そこではもはや negative theology, hyper-Realism 等は影をひそめ、思想的には衰退期に入るものとみなしている (chap. 5)。以降、A. 自体の見解への関心が高まり、C. D. に代わって B. による C. の忠実な翻訳が重視され、12世紀に入ると C. D. はほとんど無視されてしまう、と M. はいうのである。

以上みたように、本書においては、従来の一般的見解に対して多くの異論・反論が試みられ、また8—10世紀初頭といういわば思想的にはほとんど未開拓の時代に、論理学と神学の関連を中心に照明が当てられている。なお、筆者のみる限りでは、本書について J. J. O'Meara の書評が T. L. S. (Nov. 13, 1981) になされていることを付記しておく。

Jean Daniélou :

*L'être et le temps chez Grégoire de Nysse.*

pp. v+232, Leiden, 1970

谷 隆 一 郎

著者ダニエルはイエーガーと並んで、西欧に於けるギリシア教父研究の代表者の一人であった。既に1944年には、*Platonisme et Théologie Mystique* なるニュッサのグレゴリウス研究の先駆的著作を世に問うている。イエーガーもダニエルも、一般には、ギリシア教父の伝統の主流——即ち、アレクサンドリアのクレメンスからその弟子オリゲネス、更には「カッパドキアの三つの光」たる大バシリウス、ナジアンツのグレゴリウス、ニュッサのグレゴリウスに至る伝統——を、古典ギリシアの哲学、殊に広義のプラトニズムの継承・展開として捉えていることは、周知のこととしてよいであろう。ただ、ここに取り上げる著作の強調点は、必ずしもそうした連続性にはない。そこではむしろ、存在と生成に関するグレゴリオスの把握の独創的な面が示されるのである。もとより、グレゴリウスが先行思潮に多くを負っていることは言うまでもない。グレゴリオスの思索はその出発点に於いて、

近い所では、兄であり師でもあった大バシリウスの補完を目指しており、同時代の友人である「神学者」ナジアンツのグレゴリウスの感化も大であった。又、ネオプラトニズムやストアの思想財も、厳しい拮抗を伴いながら大胆に摂取されている。そうした多様な影響関係を、各々の著作の対照によって検証することにも、ダニエールはかなりの意を払っているが、要は、グレゴリウスがそれら全ての素材に新たな生命を吹き込み、一つの独創的な存在把握に達していることにある。

その中心は、ダニエールに依れば、「神的な深み（無限定な闇とも言うべき存在そのもの）を発見し、それに何らか与ってゆくことの内に、精神が絶えず変容・展開してゆくという事態」le progrès perpétuel de l'esprit dans la découverte de l'abime divin (p. 114) であった。それは、善の超越性に与る魂・精神の、何らか自己超越的な構造を示す表現であろう。それに応じて、ヘレニズムが恐れる所であった *τροπή*, *changement* の語は、グレゴリウスにあっては、「被造的精神の完全性のかたちそのもの」を意味するものとなる。換言すれば、精神の名は、善に分け与る絶えざる前進、自己超越そのものと呼ぶ名として、発見されてゆかなければならない。

ところで、ダニエールのこの書は、グレゴリウスの「生成・変化の神学」*une théologie du changement* (p. 115) と彼が名づけるものの特徴を表わす幾つかの語を拵んで、その各々について、豊富な引用により、テキストをして語らしめつつ解釈を加える、という体裁を取っている。それは順に、*théôria* (*θεωρία*), *enchaînement* (*ἀκολουθία*), *conspiration* (*σύμπνοια*), *éléments* (*στοιχεῖα*), *changement* (*τροπή*), *frontière* (*μεθόριος*), *aveuglement*, *mortalité*, *comble* (*ἀκρότατον*), *apokatastase* (*ἀποκατάστασις*) の各語であった。その配列は、言わば、キリストの受肉、復活に支えられて再創造と神化に与る人間の道行きを暗示している、と考えられる。ただ然し、生成・変化の強調は、哲学にとって両刃の剣であり、下手をすれば全ては流れるという同一性なき流れに没してしまう恐れもあろう。それ故、グレゴリウスが「精神の絶えざる前進ないし生成・変化」を自らの神学・哲学の中心的場面を担うこととして語っているとすれば、そこには微妙な緊張構造が存するであろう。ダニエールの書は、その緊張した動的な構造をしも、やや平板に語る嫌いがあるのだが、グレゴリウスの中心的主題をアンソロジー風にまとめ上げ

たものとして、我々のための有益な道標となろう。

ダニエルは先ず、グレゴリウスにおける観想 *θεωρία* の意味を見定めようとする。観想、テオーリアとは、技術知 *τέχνη* の如く個々の事物の、それぞれの領域にはじめから限定された分析を旨とするものではなく、存在連関の全体性を披くものである。そうしたテオーリアは、啓示の書たる聖書の解釈に密接に関わることになるが、そこでも個々の字義、その歴史的詮索を超えた隠れた意味連関の発見を目指す。精神の動きは、言わば、個々の記述のアレゴリー的解釈を通して、言語表現の発出の根源に立ち帰るのである。だが、神的本性は、精神がいかにもその限りを尽くそうともその把握の限界をその都度超えるが故に、魂・精神は「観想しえざるものの観想」*θεωρία τῶν ἀθεωρήτων* の裡に、絶えず前進することになる (p. 16)。従って、魂は神的本性の無限性、超越性に、何らかの否定を介して与りゆく。

ダニエルの注目する *enchainement*, *conspiration* という言葉は、我々のものの把握に於けるこうした否定と浄化 *κάθαρσις* に対応すると考えてよい。それらは部分の中に全体の調和と意志を探ね当てんとする。つまり、様々の出来事の連関は何らか時間的な実在領域に結びつけられているとはいえ、全体として一つの目的に向って秩序づけられているという。その目的とは神に似ること *l'assimilation à Dieu* である以上、*ἀκολουθία*, *enchainement* とは正に、万物の神化の過程だということになる (p. 27)。テオーリアの行為はそこに不可避的に介在するのである。各々の事物・事実を形成している要素 *éléments* は、仮にそれだけ切り離すことができるか（思考はそうした欲望の対象措定の在り方に墮する危険をつねに有するが）、単に絶えざる転変、反復の法に支配されているだけである。だが、精神とは素材ないし要素の内に現存しつつ、しかもそれに還元されることのない何ものかであった (p. 94)。それ故、被造の精神とは、単なる無際限な繰り返しとしての動きではなく、より少く存在することから、より多く存在することへの「善き動き」*le bon mouvement* を担うのである (p. 103, p. 105)。換言すれば、諸々の存在しているものの目的は、超越的な「存在」が、知性的本性を通して何らか現存するものとなり、全てが一に向うことにある。

ところで、存在に分け与るこうした絶えざる前進・生成の可能性は、正に、その

神的存在の超越性そのものに根拠を有する。何故なら、全ての限定を超えた無限性が神に於いて現実のものであるが故に、それは被造の精神の内に、絶えざる前進というかたち・姿で現存する(神の似姿)。ここに、超越との関わりに於けるその動性が、限定を受ける(造られる)ものたる精神の存在に対して、構成的に働くのだ(p. 105)。即ち、無限なる神(善)への参与・分有という事態は精神の受容性を通して限定され、かつ生起せしめられるのだが、それと同時に、善は、それに与らんと欲する精神の受容性をその都度押し上げ、より大きく善を受容しうる様にさせてゆく(p. 110)。それは、質料的な生の方式が欲求を満しては空になるということの無際限な繰り返しであることと、顕著な対照を為している。つまり、被造の精神とは、その都度限定を受けつつも、絶えず、先に在るものに自らを伸展させるという、その「絶えざる創造」la création continue を呼ぶ名であったと考えられよう。

善に向っての絶えざる生成・伸展としての精神の生 la vie de l'esprit 即ち、アレテー ἀρετή は、一度び獲得されたものが次の道行きを基礎づけるという善き動性である。グレゴリウスはそこに、静と動の驚くべき逆説を見ていた。そして、新たな受容性を抜き限定して、精神の内に(否むしろ精神そのものとして)与えるのは、正に神の無限性、超越性であった。その限りで、ここに於いてこそ、神の賜、恩寵といった言葉が有意味となろうし、被造物、精神、理性、自由などの基本の言葉が発せられる原初の間が見出されよう。――

こうした事態は何らか無世界的なものと看做されてはならないが、そこに、悪の問題が重なっている。善の無限性と悪の有限性の対立は、アレテーの道行きの否定の調べを形成しているのだ。善への動きはその対象が無限なるものであり、従って志向の限界をその都度超えてゆくものであるが故に、絶えざる前進というかたちを取る(p. 199)。それは、或る意味で、「存在」が否定を介して確かめられ宿ってきたかたち・姿でもあろう(神の似姿)。悪とは、その絶えざる創造、善の受容に与ることなく、取り残され落下してきた部分ならぬ部分、非存在(善の欠如)に他ならない。

ダニエルは最後に、再創造 ἀποκατάστασις の問題を取り上げ、死後、復活した人間にあって、一旦離散した身体に魂がいかに結合するのか、といったことを考察している。それに関して、魂はその本性からしていかなる場合(時)にもその要素

の内に現存し、又、全ての知性的被造物は万物の復活の際、一なる善に向って秩序づけられるという。ただ、こうしたことは恐らく、今の我々とは無縁な死後のことなのではなく、生と死の意味を、そして人間で在ることの普遍の姿を、キリストに於いて観想した表現と言うべきであろう。

以上、論の流れの中心線のみをやや自由に要約したが、本書の一つの要は、はじめに示した様に、善の超越性、無限性に与りゆく魂・精神の絶えざる前進・展開という構造把握にある。ダニエルはグレゴリウスのテキストを縦横に用いて、中心問題を様々な角度から跡づけている。ただそこには、探求的な、言わば全てを一度び無みするかのような垂直の論理は必ずしも見られない。グレゴリウスは発見し自ら生きた姿を語った。然し、我々はニュッサのグレゴリウスにして言いえたこと——古典ギリシアの知を超克するキリストの道、そしてそれに定位された精神の道行きの構造——を、自らの言葉・生として、一体何処で語りうるであろうか。